

支えてくれる人の大切さ

小 五

ぼくが通っていたようち園には、うまく言葉が話せない友達がいた。ぼくは、その子と仲良く遊んだり、となりにすわって給食を食べたりしていた。ある日の給食のとき、ぼくが、

「このおかず、おいしいね。」

と言ったら、その子は、

「○○。」

と自分の名前で返事をした。このときぼくは、会話は成立していないけれど、名前で「おいしいね。」と返事をしたにちがいないと思った。言葉がうまく話せなくても、気持ちが通じ合った気がしてうれしかった。

教室で遊んでいるときも、自分の名前を指さして、ぼくに何か伝えようとすることがあった。ある日には、「積み木を貸して。」と言っているように感じたので、積み木でいっしょに遊んだのをよく覚えている。外で遊んでいるときは、先生とおにごっこやすな遊びをいっしょにすることもあった。

言葉がうまく話せない、考えていることが伝えられないなど、外見では分からないし、よう害があるのだなど、小さいながらに感じた記おくがある。

遊んでいるときは、みんなと同じように友達同士もとても仲がよく、その子をいじめることはなかった。もちろん、差別をする先生もいなかった。みんながその子のことを理解して接していたのだと思う。

卒園して、その子とは別々の小学校へ入学した。元気になっているかなと、時々気になっていたが、何年かが過ぎたある日、家族と買い物をしていて、久しぶりにその子を見かけた。ぼくと目が合い、気付かないだろうと思ったが、その子の方から、

「久しぶり。」

と声をかけてくれた。向こうから話しかけてくれたこと、スムーズに話せていること、その子が名前以外の言葉を話すことに、ぼくはびっくりしてしまった。名前以外の言葉が初めて聞けたうれしさもあった。ぼくも同じように、「久しぶり。」と、笑顔で返事をした。その後、学校やゲームのことをいろいろと話した。話すときに言葉が出ないこともあった

けれど、時間はかかっても、言葉を選んで、ゆっくりと会話を続けることができた。ようち園のときからすると、考えられないくらい成長だ。きっと家族や先生、友達など、周りのかん境がその子をサポートしてきたのだと感じた。久しぶりに会ったその友達は、暗くなった感じもしないし、少し言葉がつまることはあっても、会話ができるようになっていて、会えない間も楽しくじゅう実した生活を過ごしてきたのだと感じられて、とてもうれしかった。

話すことが苦手だからといって、仲間外れやこまるようなことをされていたら、その子は今、楽しく過ごせていなかったかもしれない。ぼくと同じ小学校だったら、その子と楽しい時間を

共有できたのにと、少し残念に思った。その子の周りには、すてきな友達がたくさんいて、ぼくもその中の一人になりたいとうらやましく感じた。

言葉が話せなかったり、自分の気持ちとうまく伝えられなかったり、外見では分かりにくいなやみをもっている人はたくさんいると思う。そんな人たちをサポートし支えている人の力の大きさに気付いた。だからぼくも、なやみをかかえている人や、体の不自由な人をサポートできる人になりたいと思う。

今後のぼくの目標は、いじめや仲間外れをする人、人の気持ちを考えられない人を見たら、注意できる人、また、させない人になることだ。友達との付き合いの中で、うまくいかないことが

あつたら、物事のぜん悪をいっしょに考えられるような人間になりたい。そのためにも、しっかりと自分に向き合い、日々、努力して過ごしていきたいと思う。それを、ようち園からの友達に気付かせてもらった。

ぼくを支えてくれてる人にも感謝をし、自分もだれかの支えでありたいと思う。